

故坂口博士の學歷とその學界に於ける業績 (下)

中村善太郎

四 學界に於ける業績(下)

次に先生の史學史、歴史の理論等に關する論文につき一瞥する必要がある。これは直接間接に先生の史風を窺ふ上に重要な資料と考へる。前に述べた先生が歸朝後勿々に講演された「古代史研究の發展につきて」は此方面に於ても重要なものであるが、また先年より大學に於て開講せられた「獨逸史學史」の講義は、先生の學風が最も圓熟の境に入りし最も權威ある講義と考へられ、遺稿中に加ふべき重要なものゝ一つであらう。なほ我々の見のがす事の出来ないものは、先生のランケ及びランプレヒトに關する論文である。

ランケにつきては二つの論文が公にせられて居

る。一つは「ローマンチック時代に於ける一青年

史家の生立」で、大正八年十月史學研究會に於け

る講演で(大正九年一月及四月の史林 第五卷第一號及第二號掲載)、他は「ランケの史

學と彼れの體驗したる革命との關係」で、大正十

五年五月、史學會大會に於ける公開講演である。

(大正十五年十一月及び十二月史學雜誌 第三十七篇第十一號及び第十二號掲載) 前講演は先生が留

學時代伯林大學及びその王立圖書館其の他に於て

自ら涉獵された史料及び歴史家の著述をもととし

頗る敬虔の態度で洗練された文章を以て發表され

て居る。即ちランケの幼年期及び少年期について

は、ランケの穩健な天性が、その學べる中學のシュ

ールプフォルタがナポレオン戰爭をよそにした超

世間的學風により益々保護せられた事を述べ、次

にライプツツヒ大學に於ける學生々活よりオーダ
ー河上のフランクフルト中學教師の時代につき
ては自由戰役、ついで政治的には反革命と憲法要
求の對抗、思想上には古典とローマンチックの合
流せる時代に生息し、大學生としては古典の研究
に没頭し、中學教師としてはウエステルマン書庫
の利用と、古典教授により古典歴史家や希臘羅馬
に關する史籍を讀破し、文獻の研究より史學的研
究に移り行く階段となり、その史學の基礎を作り、
また當時勃興しはじめた民族主義を研鑽し、かく
てその世界史的研究は次第に進み、處女作「羅馬風
ゲルマニ風諸民族の歴史」となり、認められて二
十九歳を以て伯林大學員外教授に進めりと述べら
れ、次に伯林の青年教授時代につきてはフアルン
ハーゲン・フォン・エンゼ夫妻ベツチナ夫人の知遇
により、彼等を中心とした民主的、革命的、美的
な「青年獨逸」の新味に満ちた雰圍に接し、時事間

題に興味を覺え、社會生活に對する理解を養ひ、
また言語文章を洗練し、第二の作「南歐の諸君主
及諸民族第一」の如きは處女作に比し文章は著し
く洗練せられてきた、しかし彼の本質はローマン
チック者流の在野的、民主的傾向に雷同せず、民族
及び國民の爲めにする君主的國家主義であつたと
述べ、次には三年有半の南方研究旅行につきて述
べ、就中ウイーン公文書庫とベネチヤの古文書館
に於ける史料の探訪研究により、世界史を構成す
べき重要な史料の蒐集が出来た事を述べ、最後に
結論として、其の環境のローマンチックは彼れの
生立本質を中心より動かすを得ず、その史學は本
質的に自主自立を失はず、その受けた影響は外的
生活で、社交上の練磨、言語文章の洗練を受け、
また現代生活につきての理解、近世史世界史作製
上幾多の問題とその解釋につきての暗示を得たと
記し、また彼の歸朝に際し、伯林の官憲は七月草

命の流弊を高壓する宣傳を必要とし、これをランケに委託し、「歴史政治雜誌」の發刊となつたが、彼の學風は保守急進兩派ともに歓迎されず、彼の記者生活は失敗であつた事を記し、畢竟彼の使命は實用的史學でなく、一方後進史家の養成、他方自主自立的史風の完成で、かゝる史學は九十一年の生涯の三分の一期にその基礎を置かれたと結ぶ。次に後の講演に於ては、先生は七月革命迄は大體前篇と同様の意見を述べられ、次に四十八年の革命に轉せられ、まづランケと新プロシヤ王との親密なる關係を述べ、四十七年のプロシヤの各プロヴィンツエンの聯合會の際、新憲法作成に顧問たるべき内命を受けしも辭退した事を述べ、次に四十八年三月の伯林騷擾後、プロシヤ國民議會の召集、他方には獨逸全體のフランクフルト國民議會開會に際し、ランケが三回にわた

る事、プロシヤには多少形をかへた君主權復興の必要ある事、立憲政治の確立により官僚政治の弊を防ぐべき事、プロシヤの存立は獨逸との關係に於てのみ可能で、その爲めプロシヤが自ら立憲する事が必要である事を述べ、こゝにランケははじめて獨逸統一問題にふれてゐるが、ドロイゼンのやうにプロシヤは古い昔より獨逸統一の使命があつたと考へてゐないと述べ、また第三の意見書に一切の人民主權の思想及び其の制度を排斥し、欽定憲法の下賜を望んでゐるが、十二月下賜の憲法には、彼の意見が採用されてゐると記されてゐる。次にフランクフルト議會の帝冠捧呈の使節がプロシヤに到着前、第四の意見書が奉られ、其内に聯邦憲法の不完成、聯邦内部に立憲思想が漲つて居る事、憲法統一に資すべき關稅同盟の不完全、共通出版法の必要、プロシヤの軍國主義を擴張し新憲法には人民主權のドグマの匂ひが排除されるべ

き事が記され、ランケが革命的民主的の佛國のランビールを斥け獨逸のカイザーツームを主張して居る事が記され、また當時南獨に自由主義の史家ロテツクあり、フランクフルト議會にドロイゼン等がゐて、ランケの學風と相容れず、ランケの一門にもその師の學風に満足せず、高弟ジーベルの如きは政治の現實主義に奔り。一時師弟の間疎遠になつたが、ランケの體驗した第四の革命により、新獨逸の建國成りて、師弟の間柄も昔にかへり、ランケの名聲も恢復したと記され、またランケの政見をビスマルク創業の跡に徴して見ると、根本思想に於て一致してゐるとし、これはビスマルクの閣僚にランケの聽講者ルドルフ・フォン・デルブリュックがあつて、間接にランケの意見がビスマルクに影響してゐるのでないかと述べられてゐる。要するにランケの自主獨立の學風は反革命時代に醸成され、政治と關係を絶つ事が出来な

つたが、自主的史學の立場を失はず、その政見も穩健で、政治問題に意見書は奉つたが、學問の領域を越えて實際政治に携はらず、その政治記者としての失敗とこの不即不離とが彼をして永遠に生かしむる所以であると結ばれてある。この二つの論文は姉妹篇で、合せてランケの史學と其の環境とも題すべき一篇をなすものであらう。ともに直接ランケの史觀に觸れて居ないが、その史學の成立を環境によつて説明し、外界の誘惑を斥けて學問の獨立自主の學風を維持し得た事が述べられ、ランケ研究上頗る有益なる論文と考へらる。

次にランプレヒトに關しては、大正五年五月ランプレヒトの一周年に、史學研究會で講演せられた「ランプレヒトを憶ふ」の一篇がある。(大正五年十卷第四號掲載)ランプレヒトの史觀に對する批判が重要部分^分を占めて居る。さきに明治四十四年の講演では彼の史觀を僅に數言を以て片付けられたが、此講

演では、彼の少壯活躍時代「史學論争」時代の史觀と晩年の妥協的の史觀とを合せ紹介批判せられ、またランケ派につきても言及され、従つて先生自身の史觀も自らその裡に躍如としてあらはれて居る點に於て頗る有益な論文である。先生は先づ彼の修學時代に於て受けた廣汎な基礎的教育がその史觀の基礎を作れりとし、その處女作「十一世紀に於けるフランス經濟生活につきて」をあげ、次いで第二の作「獨逸中古に於ける個性及びその理解につきて」に於て、後の「ドイツ史」に見る時代推移の階段的形式の萌芽があらはれてゐると述べらる。次にライン時代「ドイツ史」準備時代に就きては、初めケルンの中學教師としての生活を叙し、この地方に残れるゲルマニー以來の原始的傳説と古跡遺物に刺戟せられ、富豪の援助によりライン地方の發展史を研究し、またボン大學の私講師となり、名著「中古に於ける獨逸經濟生活」四卷

を發表す、これ統計を歴史に應用せる最近の試みで、また根本史料により國民の經濟生活を摘抉し經濟生活を歴史生活の重要因子とするなど頗る獨創的のものなりと述べ、次に彼が眼を經濟生活より文化生活全體に轉じ、ライン地方より獨逸全體に向くるに及び、獨逸史最初の三卷の發表となり精神文化と經濟的社會的文化を相互關係に對立せしめ、時代變化の特相を精神生活にとり、これにより新時代別を作りし事を述べらる。次に彼のライプチヒ前期即ち「史學論争」時代に就きて述べ、ポンの私講師よりその員外教授マールブルグ正教授を経て、ライプチヒ正教授となり、こゝに彼の史風はウイールヘルム・ゾントの影響を受くる事となりなほ「獨逸史」の續稿中に、ランケ派との間に「史學論争」起れりと述べ、ついで此論争の梗概を叙し、當時「ゲルマニヤの歴史記念」の編纂事業の學風、ランケのイデーネーレンが史界を風靡し、社

會學心理學生物學經濟學の進歩遅々たる上、政治的風潮の強大の爲め、歴史の研究が國家を主體とし政治に傾き、博く人生々活に及ばざるに對し、他方ブルクハルト出で、國民よりも文化、政治よりも人生、時代の個性に注意を拂ふ文化史風起り、ランプレヒトの新史觀の發表さるゝに及び、一般の視聽彼一人に集中し、こゝにランケ派との間に論争開かれたりと述べ、次にこの論争に於てランケ派が敵の史觀そのものよりも彼の取扱ひし史實の調査の杜選粗漏を摘發し、これに對しランプレヒトはランケの道破せる「本來いかゞであつたか」を單なる記述的の歴史とし、歴史は本來いかにしてなつたか」を研究する發生的歴史となすべしと論じ、このランケの言が十八世紀の尙古學風に於て事實の真相を無視するに對して發せられた應症癩たるを看過し、自分のみが國民の發展を説く如くに考へ、ランケを民約説の遵奉者純理派

と指彈し、ランケが國民發展論者でローマンチケルであるを闡知しないやうに見え、ランケのイデオンレーレが時代の趨勢に關する實際的傾向論であるを無視して居ると述べ、ランプレヒトのランケ批判を誤れりと斷じ、なほランプレヒトの言論には誇張、不注意、調査不十分の缺點はあるが、その史界革新に對する意氣と、其の裡に斬新な真理の幾分が存在し、我々を啓發するところがあると述べらる。これは兩派の論争に對し、極めて公平な審判であると思ふ。次にライプチヒ後期「獨逸史」の完成、史觀の出處につきでは、先づ彼が最近の「銳感時代」を「獨逸史」補卷として公にし、次に「獨逸史」の續卷を公にせるを述べ、次にランプレヒトの發展史觀の主要を述べ、彼が發展の原動力を個人の個性に求めず、重きを時代全體、人民全體の力に置き、こゝに一般法則を見出さんとし其歴史法が、自然法に近く、彼が史學と生物學と

の比當を喜び、人民生活全體の發展を個人の經過する幼年より老年に至る心理的發展に比し、時代別を作れる事を述べ、次にランプレヒト反對派が彼の史觀をコントの實證哲學の換骨奪胎とし、またブルクハルトの學藝復興の文化を、「個性の發見」と解釋せる事に負ふとの攻撃に對し、ランプレヒトがブルクハルトとの脈絡を幾分承認するも、コントとの關係を否定し、また彼が經濟的社會的要素を重要視し、マルクスの唯物史觀を認むるも、なほその史觀が人生全體の心理的價値を看過したる事を述べ、最後に彼がこの論争期に引用典據としたのはゾントの實験心理學で、彼の學説が同時代の文化思想と類似するは明瞭なるも、その史觀の大部分は創造にて、論争をかさぬるに従ひ、その史觀を幾分修正緩和し、根本思想を明確にしたと述べらる。次にライプチヒ後期「文化史世界史」の計畫、史觀の發展につき、彼が監修を托された「歐

洲列國史」叢書の書名を「世界列國史」と改めたのは、彼に世界史的傾向の起つた證據とし、また獨米交換教授として米國に出張し、異様の文化を觀こゝにその史觀を擴充して世界文化の概念を得、また「文化史世界史」作製の計畫に基礎を與ふるため、「大學付属王立文化史世界史研究所」を設立するに至つた次第を述べ、次に彼の晩年の史觀の發展を、主として彼の「史的思索の手引」によつて述べ、彼の史觀が緩和され、文化時代の階段的進行の規則に拘泥せず、異常の進行を許し、歴史的變遷が異常の道程を辿るを認めたのは、彼の史觀が世界史に適用されし必然の結果と斷せられ、またその史觀が道德的、精神的或意味に於て政治的にかはれりとし、また人生の變遷を完全に描くには直覺的、藝術家的立脚點をとるべく、單なる科學的研究にては不可能なりとの彼の言をひいて、其史觀の一變せるを述べ、結局その史觀が唯物的社

會心理より唯心的内省的社會心理に向ひ、國家政治にも精神的省察、道德的願慮を拂ふやうになり従つて心理的觀察に於ても、ヴントよりもリップスに傾くやうになつたと述べられ、再び「史學論争」時代を回顧し、彼の史觀の變遷に着眼せられ、初め彼が斬新を競ひ史實の取扱を粗漏にし、少ラシク派を貶さんため、ランケその人をも正當に評價し得なかつたが、晩年にはランケのイデオロギイに對する批判も穩やかに、その發展史觀をも認むるに至り、また「獨逸史」に設けし文化の階段を以て一般に律せんとするは、空虚空想に屬するも、その史觀及び方法は文化發展の法則確立の偉大なる試みで、假定説ではあるがランプレヒトの價値はこゝにあると述べ、また政治史派に於ても、その史觀がランプレヒトの極力主張する認識的見地に缺け、社會心理的素養に乏しき弱點を持つ事を指摘せらる。次に彼の史學史上の位置に

つきて述べられ、彼が自分のたてた主觀時代の後期銳感期の歴史家で、また印象派から新理想主義の過渡期の歴史家で、顯敏な實感性を以て人生と世界を自然派的に捕捉理解した後、これを基礎として形式内容を苦心作成し、一個の新理想主義に到達しつゝあつたと述べ、なほ彼が文化増進に關する事業家經營家たる事を叙し、更に彼が極東の文化殊に日本國民の發展に注意し、その論著には必ず日本の文化に言及され、日本の學徒にその研究所の日本文化に關する部門を囑托し、その「文化史世界史」の建設に資するため、日本來遊の計畫あつたが、大戦のため果されなかつたと結ばれて居る。この論文は前にも述べたやうに、史學の二大潮流に對する嚴正な批判で、此裡に先生自身の史觀が必然あらはれねばならぬもので、頗る苦心された勞作と考へる。

次に先生の史學の理論に關する管見は、前記の

先生の著書講演論文によつて窺ふ事が出来るが、未だまとまつた著書としてはあらはれて居ない。

たゞ屢々もたらされたところによると、愈々の方面に着手する時期に到達したといはれて居る。ランケの史風を慕ひ、その研究法により一歩々々堅實に

順序を立て、研究を進られた先生としては、この方面の発表があとまわしにせられた事は當然で、

ランケが近世諸國民の歴史を完成した後、晩年に世界史に手をつけたと類似して居る。先生が大學

に於て獨逸史學史の講義をはじめられた事は、この方面の研究に進まれる階段と考へられ、また近

年先生の監修にかゝる史學叢書の刊行もこの方面の研究、この方面の知識の普及に進まれた階段と

考へる。この叢書は第一篇ベルンハイム氏著坂口博士小野學士共譯「歴史とは何ぞや」、第三篇リー

ス博士著坂口博士安藤學士共譯「世界史の使命」第四篇ランプレヒト著和辻學士譯「近代歴史學」(既に刊行)

されし和辻學士譯を講うて叢書中に編入する)第五篇マイヤー氏著植村安藤兩學士譯「歴史の理論と方法」が既に刊行せられ、ランケ著「近代史概論」、ランプレヒト著「歴史的思想へ」、坂口博士著「史學名家評論」は豫告のみで未だ公にされて居ない。

先生の學風は以上述べたところによつて明瞭であるが、その最もよくあらはれ居るのは大正九年七月に公にせられた「概觀世界史潮」である。これは奈良女子高等師範學校、大谷大學その他での講義に根本的に修正を加へられたもので、その中心觀照は、その序言に見ゆる如く、「一切文化の歴史潮流を辿りてこれを綜合する」點にある。しかし文化とは國家政治を全然除外し、または片隅に押込めた文化でなく、人類が營む一大共通生活の中に織りこまれて居るあらゆる生活要素を含み、従つてこの著は通俗にいふ文化史でなく、また國家政治のみに重きを置き、その他の文化は特殊の題目

の下に、自信のない記述を試る世界歴史西洋歴史とは大いに選を異にする。即ちこの著は一大共通生活の變遷を辿る先生の所謂世史である。その特徴は先生がリース博士改作の「ウェーバル大世界史」に與へた批評(史林第六卷第三號掲載)を以て答へる事が出来る。第一にランケや従つてリース博士の發展史觀、第二に統一的把握第三に同時代綜合的把握が

巧みに行はれて居る事である。その上にリース博士がその小著「近代的文化發展の趨勢」に試みられた同時代文化の綜合的把握が、この書にも行はれて居る事である。リース博士の著書は極めて簡単な要約的のもので、初學者によつては目まぐるしきまでにこの把握が試みられて居るが、先生の書に於ては古代中世では多種多様の全文化が巧みに綜合せられ、たゞ一筋の潮流となつて流れてゐるやうに、また當時の世界が渾一體を作つて居るやうに極めて巧妙に描かれ、近世及び最近世に入り

諸方面の記事が詳細にわたりかゝる把握が困難となつてからもなほこの方法が行はれて居るが、決して無理な綜合は行はれて居ない。またこの書の題名より國家政治の記事が閑却せられて居るかのやうに考ふるのは誤りで、依然國家、政治が中心となり、他の文化より圍繞せられて重要な役割を演じて居る。

要するに先生の史觀は少壯時代より憧憬せられて居るランケの流れを汲み、世界史的、發展的地より一切の過去を觀察し、ランプレヒトの社會心理的考察も輓近の文化科學の進歩社會の急激な轉變により當然あらはるべき學風としてその價値を認められ、たゞそのドイツ史に於てたてた發展の法則を全般に適用するは無謀であると批評せられて居るが、先生の研究の對象が政治以外に擴張せられたのは、時代や學界の趨勢に刺戟せられた點もあらうが、ランプレヒト研究に多少負ふとこ

ろがあるやうである。以上述べたところは先生の我が學界に残された業績の一部の紹介であるが、これによれば、先生の業績は、一、有力なる論文の發表により西洋史殊にその古代史研究が日本に於ても必ずしも不可能の事でない事を示され、西洋史研究者の行くべき道を暗示せられた事、二、西洋史並びに一般史學につき外國の權威者の説を紹介せられた事、三、史學につき後進の誘導につこめられた事、四、一般知識階級に西洋史に關する知識の普及につこめられた事である。また國民教育

上西洋史研究の必要を鼓吹せられた事は、嘗て高等學校教科目改正につき西洋史の授業時間を減ずる案に對し、頑強に反對せられた事や、大正四年十二月中等學校地理歴史協議會の講演（史林大正五年一月號掲載）に於て、發展史觀の見地より、國民性を萬古不易のものとして美化するは、反て個性的努力を殺ぐ恐れありと説き、英國がアングロサクソンの自負自重主

義より、歴史に於てもたゞ古典の時代と英國の歴史をのみ研究し、大陸諸國の近世史を閑却した爲め、世界大戰の勃發に際し獨逸の優勢に驚愕し、狼狽して獨逸發展の由來を研究しはじめた事を例證せられてゐるのを見てもその一斑を窺ふ事が出来る。